

文化統一行事きまる

「ああ野麦峠」新緑編

＝2月14日(日)、太陽館で＝



上映期間 2月6日より3月12日まで

文化行事について、実行委員会(日)午前10時です。入場券は各など検討していましたが、一月二十三日の委員会承認されまし。今回は、映画「ああ野麦峠」新緑編と「飛鳥」を、そしてまた見ぬ子へ」の編成です。

【かいつく】

昭和五十四年六月、山本薩夫監督

監督は山本薩夫原作の「ああ野麦峠」を大竹しのぶ主演で映画化した。この作品は、十七歳の若さで故郷飛鳥を望む野麦峠で死んでいく、抑圧された少女たちが、おのおの全う二百七十七万人を熱い涙でつづ

今回の「ああ野麦峠・新緑編」は前作同様、山本薩夫監督が演出景として、ドラマチックに語られるもので、ヒロインには三原順子、中井貴恵、岡田奈々、石田えり、共演は江藤潤、なべおさみ、山繁、下条正巳、風間杜夫ら。

私の趣味

八分会(三川) 松永 一郎

私の趣味はいろいろあります。が、ボスターや標語などもその一つです。保安標語などもいつも考えています。

現在、保安はとうとう。生産第一主義では、災害も減りません。「かげろふ」だけに終らず、みんなで万全の対策を考えよう。保安こそ第一です。

保安関係で、この十年間のあいだに入賞したものをあげます。

※昭和四十八年(保安監督局) 三等入選 標語

今日もまた 注意が生み出す この無事故

※昭和五十四年(炭労) 佳作入選 標語

さあやろ 保安のキメ手

まず点検

※昭和五十五年(不明) 地質入選 標語

「事故防止」 明るい家庭を作るカギ

※昭和五十六年(災害防止協会) 佳作入選 ボスター

※昭和五十七年(三池炭鉱) 天賞入選 標語

よい処置は 気づいたその場で 今すぐに

職場の同僚からは「よい趣味があるの」とか、「よかったな」

「賀状展」ひらく



一月十四日から一週間、組合事務所で開催されましたが、多色刷りの手書き賀状や、書家、画家などの見事なもの、心暖まる交流の賀状など、およそ八十点が寄せられました。手書きの部、フロッグスの部、印刷の部に分けて展示され、みなさんから喜ばれました。

随筆 白いブランコ

二十分会(三川) 町 佳郎

私はあのとき無意識のうちに、わが子の心の中に長い間大切に育ててきた、かけがえのないものを奪い去ってしまったのではないだろうか。ある後悔にも似たほろりとした、若者の「オーライ」の声とともに、車は走り過ぎていった。

去年の暮れの三十日、わが家は朝から忙しかった。年末の大掃除のためである。娘たちはその後に予定しているモチつきに期待して、自分たちの部屋の掃除、家中の窓ふき、玄関の掃除と、さもなくばさうであった。私も妻について荒物整理をしたり、掃除機をひっぱりまわしたり、慣れぬ手つきではなかった。

狭い家ながら、いざ大掃除となると大変である。妻にとっては毎日の仕事のつぎにはちがいないが、日頃とは異なった意気込みで、あれやこれやと手ぎわよく、ひとつひとつ片づけていった。

やがて私は外まわりの掃除をしたように思い、庭に出た。近所の人達も忙しいらしく、掃除機の音や窓をさかんにはたく音、ときおり子供を呼ぶ女の大げな声がする。年末にしては暖く、私は着ているものを一枚脱いだ。私が庭に出たことに気づいた末の男の子も、急ぎ足で庭に降りてきた。

ゴミ収集車が来ることを聞いていた私は、庭の隅に置いていた、変色してこわれたままのブランコを、門の脇まで運んでいった。あそこについてくる子も「もうこわれとるけん、乗られんもんね」と、さも私のすることに同意したように、部品のひとつを運んでくれた。私は一瞬、何もいえずに立たしはらへて、あの特長のある音楽とともに収集車が近づき、わが家の前で止まった。数人の若者の手によってかくされている。

原地域分会で解散集会

一月十七日、原地域分会の解散集会が、ひばりが丘の早川さん宅で行われました。

参加者は元組員・主婦会員を含めて二十七人。高田町、八女郡からもかけつけ、思い出話に花が咲き、にぎやかな一日となりました。

原社宅は、田端さんが十月に転宅、いま中川原さんが一軒で、近く転宅の予定です。

この分会では、毎年新年会をかねての分会員とともに開き、一度の団結旅行も実施しており、今後も継続していくこととしていきます。

1980年、阿蘇・松尾谷で氷瀑(凍った滝)に登る吉野さん。このとき転落遭難者を発見した。



吉野和記さん(四山・内電工・四十一歳)は、ベテラン登山家で、このほどネパール政府から、ラムジュン・ヒマール峰への登山許可が降り、出発準備のために忙しう日を過ごしています。

この登山を主催するのは、福岡県勤労者山岳連盟で、隊員は三人。小さな登山隊ですが、県下の優秀なメンバーをえりすぐっての年、吉野さんは人を知る山男。二十



吉野さんの成功を願っています。

す、吉野さんは「登山は冒険といわれるが、遊びではない」といいきり、「登山は文化であり、権利」ともいう。それは「人間が